



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	国語科における教育実習への取り組み：本校の教育実習(fulltext)
Author(s)	渡邊, 裕
Citation	教育と研究 / 東京学芸大学附属世田谷中学校(41): 6-10
Issue Date	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/2309/146633
Publisher	東京学芸大学附属世田谷中学校
Rights	

国語科における教育実習への取り組み

渡邊 裕 (国語科)

1.はじめに

—教育実習のねらい—

教育実習を行うに当たっては、授業の技術や内容はもちろんですが、その前提となる心構えが重要であると考えます。国語科では、実習全体のオリエンテーションを受けて、実習のねらいとして次のような事柄を確認することから教科のオリエンテーションをスタートします。

- ①言葉の力を育てる教科の特性を生かした教材研究を行う
- ②教材研究・授業研究・評価研究の一連の流れを単元レベルでとらえる(実態に合わせた全体計画の練り直しも)
- ③学習者中心に「学ぶ」発想で学習指導をとらえ直す
- ④研究生一人一人が自分自身の問題意識をもった研究姿勢で臨む(将来現場で研究し、実践していく教師であるために)

ここで提示することは、国語という教科に携わることはもちろん、「一人の教師として授業に向き合う姿勢」を確認することにもつながります。

ところで、現在の学習指導要領の特

徴としては、たとえば次のようなことが指摘されています。

このような事柄と①～④のつながりをもう少し見ていきたいと思ひます。

国語科においては、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること等に重点を置いて、現行の学習指導要領に改訂され、その充実が図られてきているところである。

(傍線筆者)

(平成 27 年 8 月 文部科学省「教育課程企画特別部会論点整理」より)

2 国語科の教育実習のねらい

①言葉の力を育てる

①については、「論点整理」の中でも触れられているように、国語という教科で取り扱う対象が様々な学習の基盤となる「ことばの力」につながっていることに自覚的になる必要があることを示しています。例えば説明文の学習のなかで、その内容のみを確認しても、なかなか他の場面では応用できません。論理の展開や要旨の把握などを行うためには言葉の特性を学ぶことが必要ですし、それにより内容の理解を促すことにもつながります。

また、そこで培われた事柄は、教科の枠を超えて活用することもなされます。国語学習での「基礎的な学び」に

については、応用の場面を授業内に限らず期待することができます。

けれども、その対象が授業の中に閉じられていない以上、言語生活全般に意識を向けなければなりません。伝統性はもちろん、現在的な言語生活のなされる場についても意識を向けておく必要があります。そこで実習生に対しては、国語科としての専門的な文献のみならず、例えば新聞やビジネス書といった時代的呼応や社会的要求という点についてもアンテナをはり、教科としての専門的知見からの活用の方法を検討していくことの重要性を考えるように促しています。

②単元を考える。

本校の国語科の教育実習の最大の特徴は、一つの単元をそれぞれの実習生が担当する点にあります。教育実習を行うに当たり、大学の授業や事前指導のなかで基礎的な事柄を学習してきました。しかし多くの場合「知識」として持っている段階でとどまっています。

模擬授業などを通して、1時間の授業を成立させるだけの力は身につけていても、そこでの学びをどのように次の授業で活用していくのかということへつなげていくことに近年の実習生は多く課題が見られます。他教科でもそうですが、国語の授業も「積み重ね」ということは非常に重要な観点です。

共通の土台となる「教材文」については、様々な観点のアプローチが可能

です。だからこそ「正解」はないということがいわれます。しかしそれは、「なんでもあり」ということとは異なります。ある課題やテーマに対して(条件付けをすることにより)どのようなことが見えてくるのか考えることで、「その単元で身につけることができる力」を構想することに結びつきます。実習生たちの考える指導案は、ある分野に偏りすぎてしまうことや、意欲的である反面多くのことを詰め込みすぎてしまうこともよく見られます。そのような「各時間の取り組みや目標」になりがちな視点を、単元という大枠、さらには学年段階や中学校での学びなど大きな流れの中で位置づけていく「逆算的な視点」や、一つの単元で全てを補うのではなく「引き算の考え方」を持つことによる充実も授業の現場にきてこそわかる大切な事柄であると考えます。

このようなことを踏まえ、個々に異なる背景を持つ40人の生徒の反応や疑問、意見を見極め、授業を展開していくのかを考え判断する能力が養われる必要があります。

③「学ぶ」姿勢

近年注目される「アクティブラーニング」はもちろんですが、「教え込み」型ではない、「学び合い」からの高め合いは授業において高い効果を発揮します。しかしそれらは、ただ「やればよい」ではなく、それぞれの状況や場面を見極めて活用していかなければなりません。

先に挙げたような事柄もあり、話し合いやグループワークを取り入れようとする実習生の様子が増えてきています。「ただ話しただけ」にならないようにするためにも、授業者自身が共通の土台と話し合いの課題をきちんと把握しておくことが不可欠です。

さらに、話し合いを成立させるために必要な学びの成熟が保証されていなければなりません。その段階を作るためには、表面的には「教え込み」のように見える「確認」のための時間も必要になります。また、授業を受けている生徒たちの反応や意見などに真摯に向き合うことも求められます。授業者が生徒とともに「学ぶ」姿勢を持たなければ、見なければならぬ事柄が見えなくなってしまうことも多くなってしまいます。

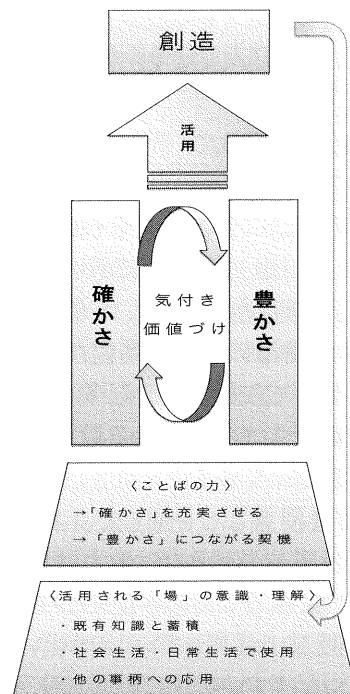
①②で示したような姿勢と結びつけ、生徒とともに授業をつくりあげていくことを考えていくことを促します。

④問題意識をもった研究姿勢

先にも示したように、一つの教材に対するアプローチの方法は多様です。例えば文学であれば、研究レベルでもさまざまな議論がなされているものもあります。そのようななかで授業を構想し、練り上げていくためには、授業者自身も軸を持つことが大切です。多くのことを授業の現場で経験することはもちろんですが、ある点から掘り下げていくことや専門性を高めていくことの効果や意義も実感して欲しいと考えています。

授業の場においては、常に想定される事柄のみが尋ねられるということはありません。わからないことをわからないと伝え、調べた上で応えていくこととともに、臨機応変な対応や話題を広げたり深めたりしていくためには、専門的な知識をしっかりと身につけていくことが重要です。そしてそれは、自信をもって授業に臨むことにもつながっていきます。

これらの事柄を国語科では、次のような形で整理し、授業作りに取り組んでいます。



3.教材研究と授業の構想

授業を行うために、教育実習では授業準備が重要になります。ここまで触れてきたことを授業の中にどのように反映していくのか、項目を挙げながら

整理してみたいと思います。

(1) 附属世田谷中学校国語科として

教科の目標として、国語科三年間の学習を通じて育みたい生徒像として次のような事柄を掲げています。

確かな言葉を通して豊かな気づきが生まれ、他者との共有を通して自分の「新たな捉え」を生み出す生徒

このように、段階を意識し整理することでそれぞれの授業での課題を明確にすることを促します。とくに次に挙げる点について、授業を重ねながら常に意識していきます。

- 「確かさ／豊かさ」をどう表現していくか
- 担当学年、単元でどのように実行していくか。→全体計画の改善。

授業ごとに「何が残るか／残ったか」ということを考えて行くことで、「積み重ね」という面から充実を図ります。また、それは計画していた事柄を行うために欠けているパーツがある場合にどのように補っていくのか考えることにも重なります。

(2) 教材研究から

国語という教科の特性として、もちろん文章を扱う機会が多くなります。そのとき、授業を行うまでの段階として次のような観点での分析を実習生に促します。

①教材文の分析(1人の読み手として)

どのような内容か。

②教材化の分析(授業者として)

ある言語的スキルを身につけることによって、どのような内容的な価値に迫れるか。(目指す方向性)

③学習活動の設定(学習者の立場から) 学び合う授業をどのように作るか。

国語を専門とする立場であるからこそ、どうしても「専門的な視点／研究的な視点」での読み方が多くなってしまいます。もっといえば、授業者は対象の文章を「詠み込んで」いますが、授業を受ける中学生ははじめてその文章と向き合っています。その段階の差をしっかりと踏まえていないと、一足飛びに話を進めてしまい、結果として実習生の「思い」のみによった「わかりにくい」授業になってしまいます。そうならないためにも、準備段階から実習生自身が段階を踏む分析を求めます。それは、授業を重ねるなかでぶつかる壁や悩みの際に見直すことで、解決策を見出すきっかけになることもあります。また、「自分の授業をつくりあげる」ための要素を整理していくことに活かされていきます。

そのうえで、学習者の視点から授業を見直すことの大切さにも触れていきます。観点としては、次のように整理しています。

1. 学び手にとって発見があるか
2. 追究する活動を仕組めるか(主体性)
3. 学びをどのように形にするか(表現するか)

悩みながら作り上げた授業だから

こそ、それぞれ振り返り反省することで、以降の授業に活かされる具体的なものが見えてきます。

だからこそ、実習において授業準備と同じくらい、授業の反省と協議に時間を割き、実習生との話し合いを重ねていきます。そうすることで、これまで「知識」として得ていたものを「活用」の段階に落とし込み、考えることにつなげることができるようになります。

例えばこの段階で実習生がその価値を再発見するものが「板書」です。子供たちが前時までの授業を振り返ることのできる唯一のツールがノート（プリント）であることに気づくことが出来ると、板書の工夫というものが学習者の視点から検討することができるようになっていきます。同様に、限られた時間をどのように活かすことができるか、考える時間を生み出すことができるかということ、ツールの工夫（ICT・ホワイトボード、付箋・・・）にも目を向けます。それは「ツールありき」の活動ではなく、学習者の立場にたち、長所・短所どちらも踏まえた上での選択につながっていきます。

4.おわりに

教育実習を終えて教科のまとめをするときに実習生が口にするのが多いのは、「大学での学びと授業の連動の難しさ」や「連続性／継続性の難しさ」といった事柄です。もちろん、もっと多くのことを学ばなければならないということが一番多く挙げられます。

今まで目を向けていなかった事柄に気づき、主体的にそれと向き合うとする姿勢につながることで、また生身の空気に触れなければわからない多くのことに立ち向かうことで、「経験することの重要性」を実際に自分でも体験し、新たな視点を得ることができるといった、「内面的な変化」が教育実習の大きな効果であると考えます。

またそこから、「生徒とともに授業をつくりあげていく」ことにしっかりと向き合っていくことができるようになるのではないのでしょうか。それができるようになったときこそ、「技術を磨く」ということの本質的な価値や必要性を考えることもできるようになるはずです。

自分のうまくいかないことばかり見えてしまい、時に自信をなくしてしまう場面もありますが、そのとき自分がどのような手段をとることができたか振り返ることや、苦手克服に努めながら、「強み」を見出し高めていくことも大切であると考えます。

実習生を指導する側も、「日常」になっているそれらの改善手段や方法、姿勢などを言語化するなど、しっかり伝えていくための方法を考えていかなければなりません。また、ここまで何度か記した「学び合い」の機会は、教育実習自体にも当てはまるものです。

「教育実習を通じた学びや効果」について、今まで以上に真摯に向き合いその効果を高めていきたいと思えます。